



2017年9月2日土曜日の午後。今回の参加者は、堤寛の医学部時代の同級生が主治医であるという患者さんご夫妻でした。奥さまが乳がんの手術後3週間です。初対面ですので、さてどこからお話してよいやら。患者さんは、何かを訊きたくて求めているのに違いありませんので、おしゃべりしながら、それをお話していただけるようにしました。

初期治療の手術を終えたばかりのMさんは、これからの治療の選択を自己選択するにあたっての考え方を模索されていました。日ごろの食事についても関心が高く、メニューや食材の話もたくさん出ました。Mさんのご主人は奥さまに寄り添い、自分はどうなサポートができるのかを模索されていました。がんという病を乗り越えて生きるのは、家族の理解や支えが重要ですが、優しいご主人がおられるMさんは、こころ強いに違いありません。 By SAYOKO

●参加者のようす

13時ぴったりにご夫婦が来室。今日のお客さまはちょっと特別です。というのは、ナント、堤寛の学生時代（慶応義塾大学医学部）の同級生が主治医であるという患者さんご夫婦だからです。横浜で開業する主治医から、堤寛について「顔の見える病理医」として紹介していただき、今回の来室となったのでした。

Mさんの気になることは、今後の治療の選択、日々の食事についてが主なものでした。途中、私たちの定番のウェルカム演奏をしました。堤のオーボエ、私のピアノ伴奏で、バッハのアダージオとG線上のアリア。そばで聴いて、少しリラックスしていただいてから、趣味の話、人生についてもお話ししました。術後間もないことを感じさせないほどしっかりしたMさんは、ご自分の病についても肯定的に受け止めておられて、しっかりした方だなあ、大丈夫と感じました。それでも、ご主人は奥さんのことが心配で、治療の効果やリスクについてもきちんと知っておきたいようでした。ご夫婦で病に向き合う姿勢がうかがわれました。がん患者を支える形はさまざまありますが、何といたって家族が基本。それがうまくいっているケースは、とてもほのほのしているなあ、とお見受けしました。

●参加者の感想 …ご夫婦より、こんなコメンをいただきました。

本日は、医療に関するお話から、術後のこころの持ちようまで多くのお話を伺うことができました。前向きに向き合うこと、マイナス思考を捨てることで心の健康を保つことが重要と感じました。

今日は私たちのためにお時間を割いていただきありがとうございました。アットホームな雰囲気の中で暖かく迎え入れてくださり、リラックスしてお話することができました。病気以外にも、医療保険制度や大学医学部の歴史など興味深いお話が聞けてためになりました。病気になったことは、気付きのチャンスなのですね。これから時間は掛かるかもしれませんが、打ち込めることを探していきたいと思えます。

またご相談させていただきたいことが出てくるかもしれませんが、その際はよろしくお願ひ致します。

■Office ; 「つつみ病理相談所」 pathos223 ■

つつみゆたか

堤寛 医学博士、病理専門医、細胞診専門医

〒470-1151 愛知県豊明市前後町善江 1735 パルネス前後 4 階. 412 号室

電話:0562-85-6996 FAX:0562-85-6998 携帯:080-6641-9802

Email:pathos223@kind.ocn.ne.jp

URL:<http://pathos223.com>

●コメント： 同席した peer supporter SAYOKO

堤寛の同級生医師の患者さんとの関わり、ご縁をいただき、このように交流できることは、とても素敵に感じました。人生には、さまざまな出会いがありますが、がん治療は人生におけるビッグイベントですので、主治医、家族、そして周囲のさまざまな人たちのサポートをうまく活用して、自分の人生を上手く生き抜くことが肝要です。今回のように、遠方からわざわざ「病理医と話そう！」に参加していただき、こちらこそ、ありがとうございました。大切に受け止めたいところから思います。今日来られたご夫婦が、「来てよかった」と感じていただければ嬉しいです。私たちも一期一会、こころ尽くして関わってゆきます。

この機会に、M さんご夫妻が生きていることに深く感動し、これからの人生をより豊かに幸せに感じて生きてほしいと思いました。せっかくの出会いですので、またお互い元気に再会したいものです。

●病理医、つつみゆたかのつぶやき

M さんご夫妻はわざわざ横浜から来ていただきました。お昼と夕食に名古屋らしいものを食べてくれたと信じます。なごやかな土曜日の午後の4時間でした。あらかじめ手術標本を主治医から送ってもらい、針生検標本も見直したうえで、セカンドオピニオンの診断報告書と顕微鏡写真を準備しておきました。すべてのデータをCDに収めてお渡ししました。間違いなく、顕微鏡的にとてもおとなしいがんでした。

Mさんは小さな乳がんを患い、3週間前に乳房温存手術を受けたばかりです。化学療法はしない方針です。術後に放射線治療を加えるのは温存手術の定番なのですが、Mさんの場合、浸潤部は7ミリ程度とわずかなうえ、非浸潤がんの部分の広がりも限局的で、完全に切り切れていると判断しました。放射線治療なしでも再発のリスクが低い(95%の確率で再発しない)と信じますと、私の意見を述べさせていただきました。そして、5%のリスクをどう考えるかは、Mさん次第と伝えました。ついでに、手術で切り切れているのだから、すでに始まっているホルモン療法もいらないかもしれないと、余分なアドバイスもさせていただきました。

ご主人は、放射線治療の副作用をとくに熱心に訊いてくれました。私はこんな風にお答えしました。放射線は全乳房にかけるため、さまざまな正常組織が萎縮します。皮膚の汗腺の萎縮から、乾燥肌となります。毛細血管の異常で、お酒を飲んだとき照射域だけが赤くなります。産毛やわき毛が抜けるのは避けられません。もし妊娠・分娩すると、照射した乳房はまったく大きくなりません。乳腺が萎縮するためです。Mさんは50代なので、これは関係ないですね。年月がたっても、照射によって硬くなった乳房は垂れず、健常側とアンバランスになると思います。放射線によって10年後以降に二次発癌する可能性も否定できません。

ホルモン療法に関する言い過ぎのコメントに対する主治医からのメール。「ホルモン療法の是非は、今回の乳癌の再発予防だけでなく、次に発症するかもしれない乳癌の予防効果もあること。とはいえ、副作用も少なからずあることを念頭に置き、考えるとよいと思います。」

実は、主治医のK先生は私の医学部時代の同期。この2年間ほど、乳がんの針生検標本を病理診断させてもらっています。お互いに訊きたいことが訊けて、間違いなく診療の質が向上しています。とくに、トリプルネガティブ乳がんに対する化学療法の適応の面で、新たな展開を実践しています。私がこれまで実践してきた「患者さんに顔の見える病理医」に加えて、「開業医に顔の見える病理医」の手ごたえを感じています。この心地よい臨床医と病理医の相互依存関係をさらに発展させたいと願っています。K先生は乳房の生検に細い針で刺すことにこだわります。太い針を使う場合に比べて、患者さんへの負担が軽くなるからです。身体的負担だけでなく、経済的負担も重いのです。彼はそんな、患者さんにやさしい医師なのです。

■Office ; 「つつみ病理相談所」 pathos223 ■

つつみゆたか

堤寛 医学博士、病理専門医、細胞診専門医

〒470-1151 愛知県豊明市前後町善江 1735 パルネス前後 4 階. 412 号室

電話:0562-85-6996 FAX:0562-85-6998 携帯:080-6641-9802

Email:pathos223@kind.ocn.ne.jp

URL:<http://pathos223.com>